



京機短信

No.293 2017.01.05

京都大学機械系工学会(京機) tel.& Fax. 075-753-5183

E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp

URL: <http://www.keikikai.jp>

編集責任者 久保愛三

あけましておめでとうございます。

2017年 元旦



どちらを見ても、世界は見通しの悪い状態で、何がどうなるか良くわかりませんが、人の心のどこかに重く暗くのしかかっている暗雲が晴れて、輝かしい一年になることを祈ります。

未知の海を無事にわたって行くためには、マニュアルには書いてない状況ばかりの中で、何物にもとらわれなくて物や状況を客観的に見ることができ、それを偏見にとらわれなくて、たとえ自分の意見と異なっていたとしても、正しく理解でき、プリンシプルから論理的にそれらのものを考えて判断できる賢者、目利きが必要です。今の日本の社会、そして教育制度も、このようなことの出来る人間を育てるシステムにはなっていないところが大きな問題でしょう。むしろ、そのような可能性を持つ人間は排除され、言われたことを善悪の判断することなく忠実に実行する、その道具的能力で優秀な一兵卒の集合が作られています。敗戦国にもたらされた状況かも知れません。

世話人

韓国社会の理解と大韓民国の使命

パク チョン キュウ（2002博卒）

韓国半島は南北に分断されていて、また南の韓国でも目に見えない線があり、左翼と右翼の間の戦いは終わっていない。その観点から韓国の現代史を京機回2014年9月（No. 238）から2015年（No. 262）まで話した。最近、また大きい事件が韓国であり左右の戦いが始まっている。それで、以前書いた内容の続きを書きながら韓国の事情も紹介したほうがいいかと思い連載を再開する。

<参考バックナンバー>

第1回：No238	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no238.pdf
第2回：No239	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no239.pdf
第3回：No241	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no241.pdf
第4回：No244	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no244.pdf
第5回：No248	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no248.pdf
第6回：No251	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no251.pdf
第7回：No255	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no255.pdf
第8回：No259	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no259.pdf
第9回：No262	http://www.keikikai.jp/tanshin/tanshin_no262.pdf

(10) 肅軍作業と農地改革

1948年8月15日 新しい国が建国され李承晩（イ・スンマン）が大統領になった。李承晩は建国を宣布するとき「民主主義は難しく、また遅いものである。しかし、義に重んじたものが結局悪に勝つという理を我々は信じるべきである。」と話した。

建国した時、韓国の一人当たりの国民所得は35ドル、文盲率が78%であった。食料が足りなかったし、国の予算の95%はアメリカの援助で賄った。当時、政党は約350もあり政治的にも大混乱であったが、その中で南朝鮮労働党、略して南労党という共産党の勢力が北韓とソ連の支援を得てだんだん大きくなった。

建国後、李承晩の課題は左翼の国家転覆活動から国を守ることであった。その時期、警察と軍が国を守る安保の二つの柱だったが、警察は韓国が植民地支配されたときのものをそのまま引き継いだ。最初は解散して新しく創るつもりであったが、左翼の国家転覆活動が強くその余裕はなかった。警察は理念（IDEOLOGY）としては右翼。だが、軍は左翼に近い組織になった。なぜなら、その時は軍は支援制度であ

り、南労党の人が意図的に入隊したからであった。

建国して2か月後の10月19日 韓国の南である麗水（ヨス）で軍の反乱が起った。反乱部隊は鎮圧されたが2533人が死亡する酷い事件であった。その後、軍にある南労党勢力を探す肅軍作業がはじまったが、軍人の10%が南労党であった。10%の南労党が軍にしながら、1950年625事変（日本では朝鮮戦争と呼ぶ）が起ったらどんな風になるのか？ 神様の意図は分からないが悲劇は必ず悲劇ではないかもしれない。人は歴史的な事件の意味を何年何十年あるいは百年後によく分かるようになる。

もう一つ、李承晩がやった大事なことが農地改革であった。韓国が建国した時、大体の人は農民であり、農民の84%が自分の土地を持たない小作農であった。李承晩は地主を説得し「有償没収有償分配」という原則のもとで、農地を再分配した。農民は生産量の30%を地主に5年間払って 農地を本人のものにする。地主は150%の生産量をもらい、また政府の事業などで優先して参加することが出来るようにした。私有財産権を一部制限したが、基本的に「自由と市場の原理」を尊重したのであった。それで、私有財産が保証された。ちなみに話したいものは農地改革が1950年の3月と4月にあり、わずか2か月後に625事変（朝鮮戦争）が起った。当時、金日成（キム・イルソン）は農民が蜂起し、自分の側になると思った。しかし、全然何もなかった。それはみんな個人の財産を持ち始めたからである。



＜1950年 東亞日報4月7日の新聞と 李承晩の農地改革法＞

2016年の韓国に起こっている事件についての私なりの理解

‘朴槿恵（パク・クネ）大統領の親友、崔順実（チェスンシル）さんの国政介入疑惑’が話題になっています。この話をする前、私は用語についての注意が必要ではないかと思います。用語と言うものはその用語を作った人の意図が入っています。あんまり考えないまま人の用語を使うのであればよく騙されるからです。それ

で、今新聞では「崔順実スキャンダル」とか「崔順実国政介入」という用語を使っていますが、私は使いません。なぜなら怪しいところが多すぎるからです。それはあと話をします。

もう一つ今の事件だけではなくて韓国の現代史も理解する必要があると思います。私が書いた「韓国社会の理解と大韓民国の使命」という文書も韓国社会の理解のため書いたものでした。今の事件は1987年の後、言わば民主化の流れの中で起った事件だと私は思っているからです。ではこの十数年間に韓国に起った事件を振り返ってみましょう。

1. 2002年の選挙と金大業（キム・デオプ）の嘘

2002年大統領の選挙は李会昌（イ・フェチャン）と 盧武鉉（ノ・ムヒョン）の選挙戦でした。選挙戦の最中、突然、金大業（キム・デオプ）という人がでてきました。以前、国軍の病院で働いた人で、李会昌候補者の息子二人が兵役が免除され、それをばれないように 李会昌（イ・フェチャン）が 身体検査の書類を廃棄するよう指示をした主張しました。証拠として録音テープも持ってきました。本当かと思われるくらいでした。新聞と放送は李会昌（イ・フェチャン）の息子の話ばかりしました。実際、息子二人が兵役を体重が45kgで免除されとののは事実でした。それで、李会昌の支持率が落ち、盧武鉉が大統領になりました。選挙が終わった後、録音テープはねつ造であるのが分かり金大業は裁判で有罪を受けました。でも、すでに盧武鉉が大統領になっていました。金大業は1年10か月の懲役で終わりましたが、韓国の歴史は変わりました。何年か前、金大業はある人から50億ウォンをもらうようになっていたが貰えなかったと主張したが、事実はわからないまま終わりました。



＜金大業（キム・デオプ）と 盧武鉉（ノ・ムヒョン）＞

2. 孝順（ヒョスン）と米善（ミソン）

2002年、米軍軌道車両がある田舎を移動するときでした。当時中学生であった孝

順（ヒョスン）と米善（ミソン）が軌道車両にひかれて死んだ事故がありました。残念な事件でした。だが韓国の左翼には反米感情を起こすいい素材にもなり必要以上に大騒ぎになりました。あちこちで酷い事故の写真が掲載されて、人を興奮させました。事故を起こす人に対する裁判を韓国に開くことが出来ないのは韓国が米軍の植民地からだとか、だんだん本質と遠い話がでてきました。それで、興奮した人が下の写真のように集まりました。



＜ 蠟燭の火集会と 孝順と米善の写真＞

3. 狂牛病という大袈裟

「狂牛病事件」は李明博（イ・ミョンバク）が2008年2月大統領に就任したあとに起きた事件です。4月、政府はアメリカの牛肉を輸入再開する方針を決めました。狂牛病は牛の脳の中に空洞ができる病で、 BSE（牛海綿状脳症）が正式な言葉です。30ヶ月以下の牛だけ輸入できるものであったのを李明博政権は30ヶ月以上の牛も輸入できるようにしました。2015年李明博元大統領が書いた本の中には実際に前の政権がアメリカと約束したものをそのまま従ったのだと書いていますが、わかりません。問題はまたTV放送はこの問題を扇動の道具として扱いました。特にMBC放送（文化放送）はダウンナー症候群の牛を繰り返し見せたり、海外の新聞の内容も誤魔化して放送をしました。「狂牛病事件」はあと李明博大統領の5年間の政治に大きい影響を与えたと思います。

大きい事件三つの話をしましたが、これ以外にも似ている事件が結構あります。世越（セウォル）號沈没事故については後で一回述べる機会があると思います。どんな風におもいますか？ ある事件をきっかけに新聞と放送が扇動し、人たちが興



＜狂牛輸入反対する蠟燭の火集会＞

奮して政治の流れを変化されるパターン。これは大体、左翼が政治をするやり方だと思います。だから、2016年韓国で起こっている事件について、新聞と放送社が言っていることをそのまま素直に信じることは、私にはどうしてもできません。

(つづく)

動く歩道と可変速高速動く歩道

(その3)

1956年卒 中谷 博

シンガポール チャンギ国際空港第2ターミナルの動く歩道

1988年に竣工したチャンギ国際空港、第2ターミナルの工事では、動く歩道22台、エスカレーター34台、エレベーター25台を受注した。チャンギ国際空港の場合は、KKIAの場合のような、規格への対応で苦しめられることは無かった。

チャンギ国際空港の動く歩道で、問題になったのは、センサーに関するもので、通行客の検出を焦電センサーという、通行客の体温を検出する方式のセンサーを用いたので、周囲の環境によって誤作動を起こさないかが問題となり、シンガポールにある代理店と連絡をとりながら、その解決につとめた。

チャンギ空港の場合でもKKIA国際空港の場合と同様の事態が起こった。契約時、1ドル240円だったのが、支払いを受ける時期には、1ドル120円になっていた。

チャンギ国際空港は世界でも有数のハブ空港で、現在は第4ターミナルまで出来ていて人の往来が非常に激しいようである。

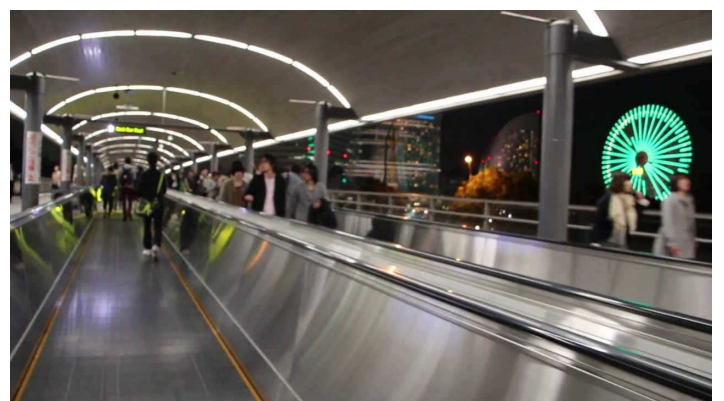


横浜、桜木町駅とランドマークタワー間の幅広1600型動く歩道（写真10）

1989年、横浜博覧会に合わせて横浜、桜木町駅からランドマークタワーを結ぶ通路に設置した動く歩道は、パレットの幅が通常の1200型より400ミリメートル広い1600型で、日本国内では最初の動く歩道である。

海外で幅広の動く歩道は、イギリスのヒースロー国際空港やガトウィック国際空港などで既に稼働していた。

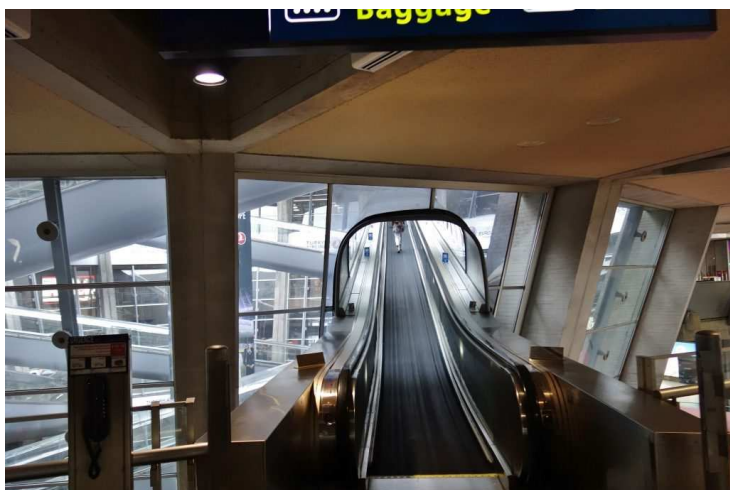
立ち止まっている人がいても、通行客が歩いて進むことが容易で、特に空港などで、大きい荷物を持っている場合に適していると考えられる。



日本国内の動く歩道の設置状況

日本国内での設置状況は、海外に比べて少ないと思われるが、北は北海道から南は沖縄まで、大部分の都道府県で多くの動く歩道が設置されている。2000年当時で、500台程度の動く歩道が設置されていたとの情報があるので、現在ではさらに多くの動く歩道が稼働していると思われる。空港や鉄道で長大な動く歩道が使われているほか、ビル間の連絡通路やショッピングモールなどでもかなり使用されているようである。しかし、日本国内では、ヨーロッパ諸国のように、ショッピングカートを利用している傾斜型の動く歩道を見かけないようである。なかには、特別なケースとして長野県松本市民芸術館のように、3次元の曲がった動く歩道もあるようだ。

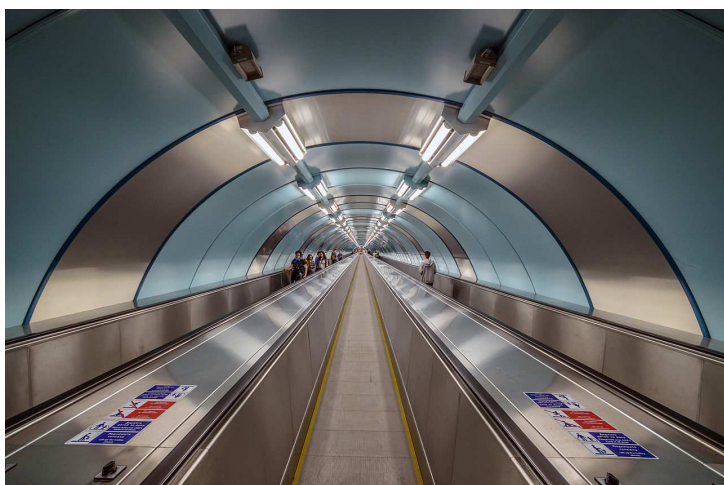
海外の動く歩道の設置例



フランス パリのシャルルドゴール国際空港では、長大なゴムベルト式動く歩道の外、空中で交差する多数の動く歩道が人の目をひく。



イギリスのヒースロー国際空港やガトウィック国際空港では幅の広い動く歩道が早くから使われていたようだ。



ロシアのサンクトペテルブルグでは、地下鉄の駅と地上を結ぶ長大な傾斜型動く歩道が設置されている。

動画をみていると、通勤客が動く歩道の上を急ぎ足で歩いている様子が見える。

ヨーロッパ諸国では、ショッピングモールで、カートを使用している傾斜型動く歩道が多用されているようだ。



スイスのシンドラー社製の傾斜型動く歩道が多いようである。



フィンランドのコーネ社製の傾斜型動く歩道も見受けられる。

シンドラー社は、日本でエレベーターのカゴと乗り場の間での死亡事故の後の対応が批判を受け、需要が激減し、結局日本から撤退することになった。シンドラー社はエスカレーターや動く歩道に関しては、世界市場占有率が第1位の企業とのである。エレベーターの世界市場占有率でも、アメリカのオーチス社について第2位ということで、広く世界中で受け入れられているにも拘わらず、先進国の中で日本での需要が以前から低迷していたらしく、事故後の対応も悪いのは非常に不可解である。

(つづく)

チュニジア(Tunisia) (その4)

檜原勇多賀 (S 3 7 卒)

ここで、1984年の『SIGNATURE』誌7月号に掲載された森本 哲郎氏の「歴史の教訓」の巻末の部分引用しておきたい。

『カルタゴはもともと、フェニキヤの植民市であった。が、地の利を得たこの植民市は、しだいに富を蓄積し本国から”独立”したのである。やがて、けれども、彼等はフェニキヤの”伝統”に忠実に従っていた。カルタゴ人の商才とは、すなわち、フェニキヤ人のそれに他ならない。

では、フェニキヤ人の秘密とは何だったのであろうか。彼等はたいへん器用な民族だった。器用な才を生かして、彼等はガラス細工や金属工芸、織物、さまざまな製品を生みだし、技術の向上に全力をあげた。フェニキヤの本国（現在のレバノン）はレバノン山脈が育てたレバノン杉の産地であった。その良材を使って、フェニキヤ人は造船と取り組み、たちまち、「造船世界一」となった。さらには便利なアルファベット文字を考案し、この文字を商売に存分に利用した。

フェニキヤ人、カルタゴ人の特質は、たいへん模倣がうまかったことである。彼等は異国の製品を片っ端から取り入れて、研究し、改良し、自らのものにして、逆に輸出した。彼等はギリシャの、ペルシャの、シリアの、エジプトのさまざまな文化を吸収しては、それを巧みに組み合わせ、新たな商品をつぎつぎにつくりだしたのだ。

こうして、この民族はまたたくまに”経済大国”にのしあがったのだ。彼等の関心は商売以外になかった。エコノミック・アニマルというなら、史上、最もエコノミックだったのは彼等フェニキヤ人、カルタゴ人だったといえよう。

それに、彼等は働きバチだった。働くことが彼等の生き甲斐であった。だから50年かかっても支払えまいと思われた巨額な賠償金を、なんと十数年で稼ぎだすことができたのである。

けれども、前記のように、それが彼等の運命を決めてしまった。他を顧みることのない経済活動が他国の恨み、恐怖、嫉妬、羨望を買い、ついに地上から抹殺されてしまったのだ。

歴史はくりかえすという。人間史のドラマは時と所を変えて、つねにおなじようなパターンで展開されるのである。だとすれば、二千年後の今日、おなじよう

なストーリーが舞台を地中海から太平洋へ移して再現されないことは、だれが保障できよう。

カルタゴの悲史は何を語っているのでしょうか。賢明なる読者は十分に察せられたことと思う。もし日本がカルタゴのような運命を欲しないならば、そのような歴史に学ぶ以外にあるまい。歴史からどれだけ教訓を引き出すことができるか、それがいまや個々の民族の、ではなく、地球そのものの運命を決めるのである。二十世紀の”後史”は、それのかかっているのだ。』（1984年「SIGNATURE」誌7月号より）

5月の中旬、建設事務所で、週末を利用した『スース(Sousse) ゴルフと目の保養ツアー』が企画されたので参加することにした。ツアーのスケジュールは、

5/19（土） 9:00 Lv Hotel Ez Zahre
 12:00 AR Hotel Hannibal Palace
 昼食
 15:00 自由行動（ゴルフ、乗馬、テニス、海水浴）
 20:00 Dinner
5/20日） 6:30 朝食
 7:15 ゴルフ組 ロビー集合
 8:00 ゴルフ組 スタート
 12:00 ゴルフ組 Club House にて昼食
 自由組はホテルにて昼食
 14:30 ホテル ロビー集合
 15:00 LV Sousse
 18:00 Av Hotel Ez Zahra

となっている。ゴルフはやらないので、自由組で参加した。参加者20名。乗用車1台とマイクロバス1台に分乗して、定刻の9時を大幅に遅れて出発した。私は、運良く、乗用車に乗せてもらった。

目的地のスースまでは140キロメートル、3時間のドライブである。途中の道の両側には、オリーブ畑が続く。スペインで見たオリーブの木の深緑色と違って、ここのおリーブは砂をかぶって白っぽく、貧相に見える。

スースは人口30万人、チュニス(Tunis)、スファクス(Sfax)に次ぐチュニジアで3番目に大きな街である。このスースの街に入る手前から左に折れ、海の方に降りて行くと、白壁に黄色の尖塔がある宮殿風に造られたホテル・ハンニバル・パレスに着く。ホテルの名前のハンニバルは勿論、カルタゴの猛将軍ハンニバルに因んだ名前である。

ホテルで昼食を済ませて、部屋で一休みしたあと、ホテルのプールで一泳ぎし、プールサイドのデッキチェアに横になる。乾いた風が、ほてった肌に心地よい。8時からの夕食は賑やかだった。乗馬組は、学生時代に乗馬クラブでならしたという先生格のN氏だけが落馬したということで、みんなから冷やかされていた。ゴルフ組の悩みは、OBすると、ボールが砂漠の中に飛び込んで、飛び込んだが最後、ボールと砂の見分けがつかず、一人当たりの平均ロストボール5個という有様であった。

翌日も同じようにプールで泳いでいた。ところが、急に空がかき曇り、強い風が吹き出した。寒くて泳げなくなったので、ともかく部屋に引き返すことにした。他の人達も諦めて、部屋に戻り始めた。そのとき、一段と風が強さを増したと思ったら、裸の肌にチカチカと痛みを感じた。

<砂だ。砂嵐だ！>

ものすごい砂が、音を立てて肌やコンクリートに叩き付けられる。目も開けておれなくなった。みんな悲鳴をあげて、一目散に建物の中に逃げ込む。瞬く間に、そこら一面は砂に覆われてしまった。

あとで判ったことだが、この砂嵐は、お隣のサハラ砂漠から来たものらしい。このような砂嵐がときどき襲ってくるそうだ。

屋過ぎに、ゴルフ組の連中が、早々と引き揚げてきた。どの顔も、疲れた、沈んだ顔つきをしている。例の砂嵐をまともに受けたのである。しかも、あの嵐の中で、意地汚くプレーを続けたというのだから、聞いて呆れる。ゴルフ組の話を総合してみると、

「ティーショットをしようとする、ボールがティーから転がり落ちる」

「打とうとすると、身体が風に飛ばされそうになる」

「打ったボールが、どっちの方角に飛んだのか、皆目分らない」

「眼に砂が入って、眼を開けておれない」

結局、ホテルで寝転がって読書していた自由組が正解であった。

(つづく)

朝永正三先生にとっての工部大学校と東京大学の合併と、その後

藤尾博重（精密工学教室元教官）

(3) 工部大学校と東京大学の合併に際して

(3-3) 合併反対運動の顛末

(5) 朝永先生の帝国大学における学業

さて、帝国大学発足時（明治19年3月）に、朝永正三先生は工部大学校において専門科第4学年終了直前に帝国大学第1学年に編入し（明治19年3月）、同年9月には帝国大学第2学年に進級したことになる。したがって、明治21年卒業までの2年4ヶ月を帝国大学で過ごしたことになる。ところが、もし工部大学校に引き続い

表 16 帝国大学発足時における 二科大学機械工学科の科目配当表
(京大百年史 部局史三 P.186)

学年	科 目	期・授業時数	卒業證書への記載有無	備 考
第一 学年	数学	第1期 毎週3時 第2期 〃 3時 第3期 〃 2時	○	1期 2期 3期 講義科目 12 12 9 計33 実験科目 8 8 14 計30 週合計 20 20 23 合計69 年間延時数 280 220 299 年間総時数 799
	物理学	第1期 毎週2時 第2期 〃 2時	○	
	応用重学	1年間 毎週3時	○	
	機械学	1年間 毎週4時	○	
	土六二学製区	1年間 毎週4時		
	機械二学製区 及二学実験	1年間 毎週4時 (1年間 毎週16時)		4時：部局史三 P.186 16時：百年史史料二 P.534 (548 352 455 年間総時数 1355)
	物理実験	第3期 毎週6時		
第二 学年	機械二学	第1期 毎週6時 第2期 〃 6時	○	1期 2期 3期 講義 9 10 0 計19 実験 24 24 35 計83 週合計 33 34 35 年間延時数 336 264 455 年間総時数 1,055
	電気二学	第1期 毎週1時 第2期 〃 1時	○	
	製造冶金学	第2期 毎週3時	○	
	二芸経済学	第1期 毎週2時	○	
	製区学及二学 実験	第1期 毎週24時 第2期 〃 24時		
	実験演習	第3期		
第三 学年	実験演習	第1期		
	意匠及講義	第2期		
	卒業論文意匠等	第3期		

て在籍していれば、実地科に在籍したはずであり、受講科目はまったくなく、工場において実学を修業し、残るは卒業論文のみであったはずである。したがって、朝永先生が帝国大学での在籍中どのように日常をすごしたのかが疑問として残る。

これに対しての解答が、朝永先生の卒業証書よりうかがい知ることができる。その卒業証書には、受講科目と担当者が列記されており、この科目はなにを意味するのだろうか。

東京大学百年史 資料二 P.534には、発足時における帝国大学工科大学の配当科目が記されて、ここでは機械工学科分を引用し、学年ごと第2欄、第3欄に科目、期・授業時数を記した。なお、表16に示した科目配当表は、帝国大学発足時のものであって、翌年には大きく改編されている。このことから表16は暫定的なものであって、明治18年12月に工部大学校が東京大学工芸学部吸収されたときの工芸学部の学生を対象とした科目配当表であったと言えよう。

表16の第2欄に記載された配当科目で卒業証書に記された科目については、表16の第4欄に○印で示した。また、第5欄には、講義科目・実験科目の週時間数、および、それらの合計時間数を、学期（3学期制）ごとに示した。この表をみると、朝永先生は帝大に第1学年に編入したことになるだろうが、朝永先生の卒業証書を見ると、第1学年、第2学年のすべての授業科目全てを履修したことになっている。ただし、製図・実験・実習科目について受講したか否かは不明であるが、卒業証書に記載の科目は授業科目のみであり、製図・実験・実習科目が配当表に記載されているのであれば、これらの実験科目も当然受講したといえよう。

ところで、表16での第1学年における実験科目「機械工学製図及び実験」の週時間数は、東京大学百年史 資料二 P.534には1年間を通じて16時間と記載されている。しかし、東大百年史 部局三 P.186では各期4時間となっていて、二つの数字のあいだの差が大きい。ここでは百年史 部局史三に記載のデータのもとについて論じることにする。このことについての妥当性は改めて後述することになる。

帝国大学第1学年での、各学期における1週あたりの講義時間12, 12, 9時間、実験実習科目については 8, 8, 14時間、合計時間数は20, 20, 23時間。帝国大学は3学期制であり、各学期期間は、東京大学のそれと同じ14, 11, 13週である。この数字をもとにして計算すると年間延時間数799時間、第2学年では週あたり講

義9, 10, 0時間, 実験実習科目24, 24, 35時間, 合計33, 34, 35時間, 年間延時間数1,055時間となる。なお, 第2学年第3期では実地演習については, その受講時期及び週当たりの時間数は記されていないが, 東京大学第4学年, および, 工部大学校での第5・6学年でも, 各科目については終日課せられたと考えるのが至当であり, つまり, 午前8時～午後4時までの7時間, 週時間数35時間とするのが適切であろう。

さて, 朝永先生は帝大における配当科目のすべての科目を受講可能であったかを検討する。朝永先生が帝大に編入したのは公式には明治19年3月であり, 第1学年としてはその期間は同年3月から同年7月10日までの大凡4ヶ月間である。第1学年のすべての講義・実験科目を4ヶ月の間に受講したとすれば, $799\text{時間}/13\text{週}\div 62$ となって, 週当たり62時間も受講したことになる。この数字は1日当たり受講7時間として, 週35時間を大幅に超えており, 4月～7月まで4ヶ月間に週62時間を受講することはとても不可能。

工部大学校と東京大学工芸学部とが合併して帝国大学工科大学が発足したのは明治19(1886)年3月1日である。天野郁夫は著書「大学の誕生(上)」P.89(中央公論新社刊)において, この3月1日に関して次のように記している。「我が国の近代大学制度の実質的な出発点にあたる。東京帝国大学がその後長く創立記念日として祝うことになるこの日に、帝国大学では何の式典も行われなかった。」と。つづいて、「この3月1日というのは、実は『帝国大学令』が公布された日である。しかも創設といっても、その日にまったく新しい大学が設立されたわけではない。初代総長渡邊洪基自身、同年九月の第一回卒業式の演説で述べているところによれば、『本年三月一日ノ勅令アリテ、東京大学ト工部大学校ノ事業ヲ更正シテ、帝国大学ヲ創設』したのだ、つまり実質的には両大学を合併・再編して『帝国大学』にしたのだ、いう程度の変化にすぎないという認識であった。の式典もなかったのは、然というべきかも知れない。」と記している。

この記述の通りとすれば, 3月1日の帝国大学発足というのは法令上のことであり, この月日より以前から両大学の合併・再編は実質的に進めていたのであろう。このことを裏付けるような記述が残されている。工部大学校に在籍していた菅原恒覧は, 「文部大臣 森 有禮公に上るの書」に次のような内容を記している。「然れ共大勢は遂に動かすべからずして十九年一月に至り工部大学校は廃止

せられ同時に東京大學は帝國大學となり、帝國大學に工科大学を置き工部大學校の學生は之に編入せられたり」と（舊工部大學校史料附録 P.120）。

この記述によれば、明治19年1月には工部大学校はすでに廃止させられており、実体としては合併・再編は進みつつあったと推測される。

このように、工部大学校、東京大学工芸学部との実質的な合併により、授業も明治19年1月にはすでに始まっていると推測すると、同年学期末7月10日まではおおよそ26週であり、1学年の総授業時間数799時間より、 $799/26 \text{ 週} \div 31 \text{ 時間/週}$ となり、当時の週当たりの授業時間数が最大限35時間であったこととの兼ね合いで、この週31時間という授業時間は妥当な数字となろう。なお、帝国大学 第1学年で機械工学製図及工学実験について、東京大学百年史 資料二 P.534には1年間を通じて16時間と記載されており、この数字をもとづいて年間延べ時間数は1,355時間であったことは表16に記入した（表16の破線以下）。表16の配当科目を明治19年1月から講義されていたとしても、週当たりの時間数は $1,355 \div 26 = 52 \text{ 時間/週}$ となって、その数字は実行不可能である。表16 第1学年における「機械工学製図及工学実験」の授業時間は、東京大学百年史 資料二 P.534での1年間を通じて週16時間は間違いで、東大百年史 部局三 P.186に記載の4時間とするのが正しいであろう。

表16において、第1学年の週当たり授業時間数は20時間ほどで、この週あたりの受講時間数は少なく、このことは工部大学校との合併により、東京大学との整合性をはかる上で、そのような措置を取らざるをえなかったのであろう。

ここまでの検討で、朝永先生らは帝国大学へ編入する以前に明治19年はじめには実質的に東京大学理学部の工学系学科に在籍していた学生と同席して授業を受けたと推測してきた。ところがこのことについて、東京大学百年史 通史一 P.500以降においても同様な見方を記している。

これまでに、明治18年（1885）12月に東京大学工芸学部が設置されたと記してきた。この時、東京大学法学部において、文学部にあった政治学科を法学部に移し、法学部を法政学部に変更した。この法政学部と工芸学部は、明治19年3月の帝国大学発足までの3ヶ月余の存続期間であった。このことを指して、東京大学百年史 通史一 P.504 にはつぎのように記している。

「先に、両学部の設置は僅か三か月余に止まったと記したが、十八年の歳末であったのもかわらず、生徒・教官の配置換え等は直ちに行われた模様である」と。

この記述からも明らかなように、東京大学百年史の編纂に際して、この部分の担当した執筆者も筆者と同様の考えに至っていたことが分かる。

なお、表16の帝国大学 第1学年における数学は、学期ごとに 3 3 2 時間/週であり、この授業内容は不明。しかし、表10にみられるように予備門では、微分・積分は授業の対象外であったのに対して、表11、および表12から判断すれば、東京大学になって初めて微分・積分が講義されると推察されたことから、帝国大学においても微分・積分は同様に扱われたと考えて差支えなからう。

(つづく)